

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00514

研究課題名(和文)メコン川流域の叙事詩『ターオ・フン、ターオ・チュアン』の研究

研究課題名(英文)A Study on Thao Hung THAO CHUAng Epic of Maekong River Basin

研究代表者

宇戸 清治(Udo, Seiji)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：30185053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：2019年からの2年間は、タイとラオスでの調査、学術交流、関連資料の収集、データベース作成で成果を得た。両国の研究者から情報と助力の提案を受け、今後の研究展望が開けた。2021年からの3年間はCovid-19のパンデミックにより調査や情報収集が困難となり、自らも感染したため研究の進展は僅かであった。さらに2022年には研究代表者が脊柱管狭窄症を発症し、研究活動が不能となった。リハビリ治療のため、調査やデスクワークを遂行できず、最終的には研究継続を断念した。収集済みの資料は日本の他の機関や個人の有するものを優に凌駕しており、研究代表者は将来も私費で研究を続け、成果を社会に発表する予定。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は研究代表者の発病によって完遂が中断された。以下では彼が将来的に研究を完遂したものと仮定した場合の学術的、社会的意義について記述する。日本ではこれまで東南アジア近現代文学の翻訳が民間基金や学術機関によって担われ、その点数は世界的に最も多い。その理由は日本と東南アジアとの地理的文化的近さ、日系企業の進出などにある。ただ、この地域の建国神話や宇宙論、古典文学の研究はようやく始まったばかりである。日本とこの地域の関係緊密化が予想される今日、ラオスで知られたTHTCの研究と翻訳という成果は両国間の相互理解と友好促進に寄与し、またそれを契機にアセアン地域の豊かな文化遺産への関心も高まるだろう。

研究成果の概要(英文)：In the two years since 2019, the principal investigator achieved great results through research, academic exchange, collection of materials, and database creation in Thailand and Laos. Receiving valuable information and suggestions for assistance from researchers of both countries, the future research has opened up. For three years from 2021, research progress was minimal due to the Covid-19 pandemic, which made it difficult to conduct surveys and gather information, and because the principal investigator himself became infected. Furthermore, in 2022, the principal investigator developed spinal canal stenosis and was unable to carry out research. Due to rehabilitation treatment, he was unable to conduct research or do desk work, and ultimately gave up on continuing his research. The collected materials far exceed those held by other institutions or individuals in Japan, the investigator plans to continue his research at his own expense and present the results to society.

研究分野：タイ語、タイ文学、タイ映画研究、東南アジア地域研究

キーワード：ターオ・フン、ターオ・チュアン メコン河流域 英雄叙事詩 ラオス古典文学 東南アジア文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

『ターオ・フン、ターオ・チュアン』(以下THTC。ターオはタイ＝ラーオ族系国主の称号。フンとチュアンは固有名で同一人物)は、古ラーオ語とタイ・ルー文字が混在した形で貝葉本に古い韻文で文字が刻まれた、全部で4,997節に及ぶタイ・ラーオ族の物語である。THTCの特徴を要約すれば以下の4つとなる。

メコン川流域に成立したシップソーンパンナーに実在した英雄主を賛美した作品であり、タイ族のスコータイ王国(1240、現在はタイ王国)、ラーオ族のランナー王国(1292、現在はタイ王国)、ラーオ族のランサーン王国(1353、現在はラオス人民民主共和国)などのタイ＝ラーオ族国家成立以前の同地域の興亡史を記した最大の文学作品、英雄叙事詩であるとされる。

当該地域で優勢であったモン・クメール系民族が13世紀以降のモンゴルの南進によって勢力を削られる中、その間隙を埋めるようにそれまでクメール帝国の支配下にあったタイ＝ラーオ族が独自の国家の樹立を目指した歴史が克明に描かれており、メコン川流域の古代史研究としての価値が高い。

THTCでは国王の称号にルアンブラバーン方言の「ターオ」を用いていることに典型的に見られるように、11～12世紀にかけてメコン川流域で覇権を争っていた諸民族とその言語分布が分かり、言語学的にも貴重な素材である。

古クメール帝国スールヤヴァルマン二世時代に建立されたアンコールワット回廊壁画に彫られたシラム・クックの兵士群像は、ターオ・チュアン王が友邦の立場から援軍として差し向けたシラム族の軍隊であったという説(チット・プーミサック『サヤム、タイ、ラーオ、コームの名称の起源』)があり、THTCの比較研究を通じてこれが妥当な説か否かを検証できる。

## 2. 研究の目的

THTCはタイ、ラオス、ミャンマー、雲南、ベトナムにまたがる広大な地域の民族間の対立を超えた統合を理想とした英雄王にまつわる叙事詩である。この神話的な英雄譚は、タイ族最初の国家であるスコータイの建国以前の11世紀にメコン川流域に勃興したタイ＝ラーオ族がモン族、クメール族などの既存勢力に対抗しつつ、ランナータイ王国(のちのチェンマイ)やランサーン王国(後のラオス)を樹立するに至った激動の時代の作品で、文学的観点からも歴史学的観点からも極めて重要な作品であると言える。本研究ではTHTCを日本で初めて総合的に研究することで、メコン川流域におけるタイ＝ラーオ族の初期の社会と文化の諸相を明らかにし、併せて作品の日本語訳を刊行することを目的とする。

わが国における東南アジア文学の紹介は、トヨタ財団や大同生命国際文化基金や民間による出版があり、タイであれば『タイ古典文学選』(富田)から現代文学まで相当数の翻訳成果がある。しかし学術研究に目を転じれば、『タイ現代文学案内』(岩城)、『東南アジア文学への招待』(宇戸・川口健一)、『タイ国家と文学』(吉岡)など近現代以降の紹介本しかない。しかも、本格的な古典文学研究書と言えるのは『劇詩プラアパイマニー研究』(富田)を唯一の例外としてほぼ皆無である。ましてラオスの古典文学に到っては抄訳に上述の『ラオスの民話』があり、『ラオスの歴史』(上東)にチュアン王伝説に関する記述があるのみで、

わが国では本格的な研究はまだない。

他方、東南アジア研究が盛んな欧米ではタイ古典文学の研究や翻訳は日本より先を行く。古くは Shuweithgut, P 『Étude sur la Littérature Siamoise』が古典文学の記述に多くを裂いており、他にも Bofman, T. Helene 『The Politics of the Ramakian』、Hudak, T. John 『The Talen of Prince Samuttakote』などがある。翻訳では Chris Baker、Pasuk Phongpaichit 『The Tale of Khun Chang Khun Phaen』が出色である。翻ってラオス古典文学となると、本格的な研究や翻訳は皆無で、Thao Kene 『シン・サイ物語』の仏語版があるに留まる。

しかし近年タイで発見されたマハーシラー書写本 T H T C のタイ国内での研究と翻訳が進み、ラオスに知的刺激を与えた。その結果、トヨタ財団の助成によって現代ラオス語訳『叙事詩ターオ・フン、ターオ・チュアン』(Thao Hung Thao Cheuang Epic - Adaptation into Modern Prose、ラオス国立図書館、2000) 2巻本が出版された。わが国では T H T C の研究と翻訳はまだ端緒にもついていないというのが現状である。

従って、T H T C の総合的研究はタイを除く世界では初めての試みとなる。また、本作品の全訳が刊行されれば、日本では中国やインドや中近東の古典文学を除く東南アジア地域初の古典文学の刊行となり、日本におけるアジアの古典文学紹介に新たな頁を開くことになる。

### 3. 研究の方法

#### (1) 物語の成立に関する文献学的アプローチによる研究

T H T C はラオスの研究者マハーシラー・ヴィーラウォンによる 1942 年の書写本がタイ国立図書館にあるのみで、原本はいまだに発見されていない。他方、チュアン王に関する記述は『パヤオ年代記』『ラーンチャーン年代記』『グンヤーン・チェンセーン年代記』『ラーンナータイ年代記』にも見られ、王名はクン・チュアン、チェット・チュアンなど多様で、メコン川流域に居住していた民族が使用したと思われるモン・クメール語と西南タイ語が混在している。それらの複数文献の比較検討を通じて T H T C 成立の変遷を文献学的に比較するのが本研究の第 1 の目的である。

#### (2) 歴史学的アプローチによる研究

ラオスには『クン・プロム伝説』というラーンサーンの建国王の英雄譚がある。これはジャヤヴァルマン 7 世時代に南詔から南下したプロム王が 7 人の息子に 7 つの国を統治させたとする神話である。T H T C と『クン・プロム伝説』の成立時期は似通っており、2 つの英雄譚は共に高地に居住していたタイ＝ラーオ族がクメール俗の支配の間隙を縫うようにメコン川、ナーン川、ピン川流域の平原に進出しムアン(数千人単位の都市)と呼ばれる萌芽的な民族国家を形成した時代の物語であるということである。その点に着目しつつ『クン・プロム書』とも比較対照することで、T H T C で描かれたメコン川流域をめぐる国、地域、民族の諸相を歴史学的に明らかにするのが本研究の第 2 の目的である。

#### (3) 文学的アプローチによる研究

豊富な古典文学を有するタイとは異なり、ラオスでは従来『シン・サイ』『カーラケート』などの民話しかないとされてきた。しかし T H T C は言語も文化も共通する両方の民族に共有されてきた作品であり、「東南アジア地域に生まれた最も長大な叙事詩である」(Kongdeuane Nettavong)。原典は未発見ながら、ラオス人研究者マハーシラー・ヴィーラウォンが 1942 年に書写した貝葉本がタイ国立図書館に保管されている。タイでは近年この書写本の研究が進み、2006 年には現代タイ語訳も刊行された。翻ってわが国では『ラオス

の民話』(根岸・前田)で現代語抄訳の「クン・プロム伝説」「勇敢なチュアン王」が翻訳紹介されたり、『濁流と満月 - タイ民族史への招待』(星野)にT H T Cへの若干の言及があるのみである。本研究ではT H T Cの物語構造と思想を文学的観点と言語学観点から分析する。併行して、T H T Cの本邦初訳を完成させ、わが国の東南アジア文化研究の一助とするつもりであった。

#### 4. 研究成果、学術的意義や社会的意義

2019年度は2019年12月と2020年3月の2度にわたり、タイ及びラオスでの現地調査、研究者との学术交流、関連資料収集、3年間の研究の基礎となるデータベースの作成で大きな成果があり、当初目標をほぼ達成できた。2020年度はその成果に則ってさらなる現地調査、現地研究者からの聞き取り・意見交換、小規模セミナーを実施し、研究の深化を図る予定であったが、新型コロナウイルスの世界的拡大(パンデミック)に伴うタイ、ラオス、ミャンマー、ベトナム、カンボジア等アセアン各国の入国禁止処置のあおりを受けて現地調査を断念せざるを得ず、2年目の研究予定には大きな支障となった。ただしその中でも、前年度に収集した関連資料の内、主要な資料の解読と要点整理、解明すべき問題点の抽出と解決方法の模索、オリジナル版に近い叙事詩の試行的邦訳などは実施できた。しかし、バンコクのタイ国立図書館に保存されているとされるラオス文字原典の貝葉書、またはその全体複製は入手できておらず、このマハーシラー・ウィーラウォンによる1942年書写本の2006年タイ語完訳を元に、物語全体象の理解、プロットやエピソードの抽出と分類、ラオスの英雄譚『クン・プロム伝説』との比較を行った。2021年度を迎えてもコロナ禍の収束機運は見え、現地調査の見通しが立たないことから、収集資料の読解・分析と日本語への翻訳は2020年度実施したやり方を踏襲、深化させるほかはなくなった。

上述のように2021年からの3年間はCovid-19のパンデミックの影響により現地調査や情報収集が困難となり、自らも感染したため、研究の進展は僅かであった。さらに2022年には研究代表者が脊柱管狭窄症を発症し、研究活動が不能となった。リハビリ治療のため、調査やデスクワークを遂行できず、最終的には研究継続を断念した。ちなみに収集済みの資料は日本の他の研究機関や個人の有するものを優に凌駕しており、研究代表者は将来も私費で研究を続け、成果を社会に諫言する予定である。

本研究は研究代表者の発病によって完遂が中断された。以下では代表者が将来的に研究を完遂したものと仮定した場合の学術的、社会的意義について記述する。日本ではこれまで東南アジア近現代文学の翻訳が民間基金や学術機関によって担われ、その点数は世界的に最も多い。その理由は日本と東南アジアとの地理的文化的近さ、日系企業の進出などにある。ただ、この地域の建国神話や宇宙論、古典文学の研究はようやく始まったばかりである。日本とこの地域の関係緊密化が予想される今日、ラオスで知られたT H T Cの研究と翻訳という成果は両国間の相互理解と友好促進に寄与し、またそれを契機にアセアン地域の豊かな文化遺産への関心も高まるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------